

## 動物病院ですべき臨床医の役割とは

長野秀一<sup>†</sup>（ながのペット病院院長）

アフリカの奥地で医療活動に携わっていた日本の医者が、現地の人たちに教えられたこととして「人は病気で死ぬのではなく寿命で死ぬのだ」と書かれた記事を読んだことがある。日本でも同様の話を耳にするが、「いのち」の理解を「生命」の問題ととらえる生物医学に拠って立つ医者には、このような俗説は到底承服できないかもしれない。しかし、存在の不条理を突き詰めて行くと、いのちの問題は生物医学で割り切れるほど単純なものではない。単なる生物としてだけでなく、知的で社会的で文化的な存在でもある人間は、死を受け入れるにあたり今尚形而上学的な思いから自由ではありえない。

フランスの哲学者ガブリエル・マルセルは、ものごとを理解するためには二つの異なる認識の仕方があり、それらは分けて考えねばならないとした。

一つ目は、自分の目の前にあり、それゆえ外部から対象化可能な問いかけであり、マルセルはこれを「問題」と名付けた。二つ目は、自分がその中に巻き込まれており、それゆえ外部から観察不可能な生の次元の問いかけであり、彼はこれを「神秘」と呼んだ。

「問題」というのは自分の存在から離れて、自分の前に投げ出されてあるものであり、外側から客観的にそれを分析し、知識や技術を使って対処して解決することができる領域である。問題における認識の有様は、普遍的な妥当性を備えた真理を指向する自然科学の認識法であり、解決された問題は人間がそれをコントロールしたり支配することができる。一方、「神秘」は、それを自ら生きるという形でしか答えを与えることができないような領域である。マルセルは「自分自身が可能であるための内在的な条件を浸食するような問題」といつているが、仏教という生老病死のような人間が逃れることのできない業といえれば分かりやすいかもしれない。「神秘」と向き合うには、問いかける私そのものが、問いに巻き込まれてしまうため、客観的な解決は不可能であり、支配したりコントロールしたりすることもできない。「神秘」における認識の有様は、スピリチュアルな次元での問いと答えであり、宗教に通じる実存的な認識法である。

マルセルは、「ただ『問題』を考えることだけが重要で、それが何よりも優先されるべきことだ」という考え

方は大きな間違いだとし、人間が完全には理解することができない「神秘」の次元があることを説いた。さらに神秘に近づこうとする際の望ましい態度は、謙遜、畏敬、そして開かれた心で臨むことであるとした。

獣医師の臨床現場に目を向けて考えてみよう。

病気の動物を飼い主が病院に連れてきた。獣医師はこの動物を診察し、今流にいえばエビデンスを基に診断を下し、飼い主に治療法を提示して、選択された治療を行うことになる。

ここまではいわば「問題」の領域といえよう。これで病気が治ればめでたしめでたしで、飼い主は喜び感謝しながら彼・彼女らの動物と共に病院を後にすることだろう。

しかし、すべての病気が治るわけではない。動物が薬石効なく死に向かい不可逆的なステップを踏み始めたとき、そこから飼い主は「神秘」の領域に入ることになる。「なぜ私の犬は死ななければならないのか」という問いに飼い主は向き合わねばならない。アメリカの精神科医キューブラー・ロスが説いた「死の受容のプロセス」を、この飼い主も踏まなければならない。エビデンスが示す余命の確率などを獣医師が説明したところで、愛する動物に死の宣告をされた飼い主には何の救いにもならない。

我々獣医師は、マルセルが指摘したように「問題」すなわち生物医学のことを考えることだけが重要なことで、それが何よりも優先されるべきことと考えているきらいがある。そもそも大学における教育からして精密かつ科学的な獣医学を教えても、飼い主にとって彼・彼女

## 長野秀一

## —略歴—

1975年 日本獣医畜産大学卒業  
同年 横須賀市役所勤務  
1977年 退職  
1978年 開業現在に至る



<sup>†</sup> 連絡責任者：長野秀一（ながのペット病院）

〒237-0064 横須賀市追浜町1-37 ☎046-865-7515 FAX 046-866-5511

らが飼う「動物が病むこと、患うこと、死を迎えることとはどういうことなのか」は教育しない。学生も臨床医も病因論、病態論そして治療法については勉強したとしても、飼い主、獣医師が必然としてある動物の死とどのように向き合うかという「神秘」の領域のことには備えないのではなかろうか。

「街中の動物病院が何のためにあるのか」と聞かれて何と答えるだろう。

「病気の動物を治すためにある」というのが大多数の獣医師の答えだろう。この問いに「病気の動物を死なせてあげるためにある」と答えたベテランの獣医師がいる。蓋し名答である。

不治の病を宣告された飼い主は途方に暮れるだろう。

「困ったねえー」と声をかけるところから飼い主と獣医師の神秘が始まる。高度先進獣医療を受けさせる余地が残っていたとしても、すべての飼い主がその選択をできないのが現実である。高い治療費が払えない場合もあるだろう。近くにそのような施設がない場合もあるだろう。治療しても動物につらい思いをさせたくないと考える場合もあるだろう。それで良いのか迷いながら何もしないという選択もあるかもしれない。飼い主の「困ったなあー」の手始めである。

仕事や社会的責務のために動物の面倒をみることができない人もいる。飼い主自身が病を抱えていたり、高齢で動物の面倒を見切れない人もいるだろう。或は死を看取るプロセスを歩むことに大いなる不安を感じる人、治療や看護の途中で心が折れそうになる人、そして折れてしまう人もいるだろう。次なる飼い主の「困ったなあー」である。

いよいよ死が近づき動物が苦しみだすと、「なぜこの子が苦しまなければいけないのだろう」と思い悩む人が

いる。動物が亡くなった後でも「なぜうちの子が死ななければならなかったのだろう」と飼い主は思い悩むのである。「困ったなあー」と途方に暮れる飼い主を前にして獣医師ができることは、飼い主の傍にいて「困ったねえー」と声をかけ、彼・彼女らの病の語りにじっと耳を傾けることである。これも、いやこれこそが臨床医の務め、大学では決して教えてくれない臨床医の重要な役割の一つである。

街中の動物病院でペットが亡くなった際、飼い主が自分の動物が良き死を迎えることができたと思えば、その動物病院の役目は果たされたといえるのではないだろうか。

逆にたとえいくら最新の設備、最高の治療を標榜しようと、そこで飼い主がペットの良き死に出会えなければ、仏作って魂入れず、その病院は動物病院としての役目を果たしてはいなかったと考える。

「問題」とは次元を異にする「神秘」の次元があるということ。いったい誰が獣医師の卵たちに教えるのだろうか。

## 参 考 文 献

- [1] 安藤泰至編：「いのちの思想」を掘り起こす，岩波書店，東京（2011）
- [2] ガブリエル・マルセル：存在と所有，渡辺 秀，広瀬京一郎共訳，理想社，東京（1957）
- [3] 山本 信編：マルセル「存在の所有」，世界の名著 75，林田新二他訳，中央公論社，東京（1980）
- [4] ガブリエル・マルセル：存在の神秘，序説，峰島旭雄訳，理想社，東京（1963）
- [5] Alfons Deeken：よく生きよく笑いよき死と出会う，新潮社，東京（2003）
- [6] Arthur Kleinman：病いの語り，江口重幸他訳，誠信書房，東京（1996）